

「直観とは意識的に形態を創りだそうとする新しい理性のことだ」とマレーヴィチは語る。因襲的思考を脱し新たな美学を築こうとした100年前の試みに思いを馳せつつ、諸々の柵から離れた建築のあり方を考えていきたい。 —竹山 聖

本課題では、以下のプロセスで設計をおこなった。

- 1 マレーヴィチの作品等からシュプレマティズムについて理解を深め、「脱色する空間」という言葉を独自の解釈で定義する。
- 2 方位・等高線・道路以外の情報が隠された敷地において、上記の定義に従って空間を設計する。

P. 52 WORKS

P. 58 ESSAY

竹山 聖「脱色する空間」

竹山研究室 2017年度スタジオ課題

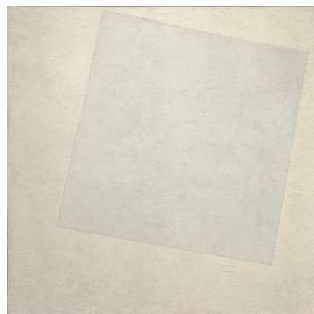
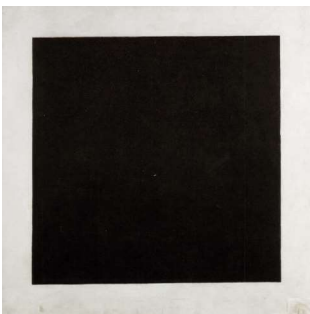
シュプレマティズム — 脱色する空間

読書記録

カジミール・マレーヴィチ「キュビズム、未来主義からシュプレマティズムへ——新しい絵画のリアリズム」
「シュプレマティズム」『ロシア・アヴァンギャルド芸術』、J.E. ボウルド編著、川端香男里他訳、岩波書店、1988
竹山聖「形式化への意志と醒めた爽やかな楽観」『現代建築を担う海外の建築家101人』、鹿島出版会、1985
村上春樹「騎士団長殺し」、新潮社、2017
セミール・ゼキ「脳は美をいかに感じるか——ピカソやモネが見た世界』、河内十郎 監訳、日本経済新聞社、2002

カジミール・マレーヴィチとは

「Black Square」(1915) ◀
「White on White」(1918) ▶



ウクライナ・ロシア・ソ連の芸術家。キュビズムや未来派の強い影響を受けて派生した後、無対象を主義とするシュプレマティズムに達した。「White on White」など意味を徹底的に排した抽象的作品を追求しており、戦前における抽象絵画の一つの到達点であるとも評価されている。

「空の青はシュプレマティズムのシステムによって征服され、漂白され、本当の永遠の概念を示す超越的な白へと移行してゆき、そうして空色の背景から解放されたのである。」

第10回《国策展》によせられた声明文(1919年)

「画家は、もし純粋な画家たらんとすれば、主題と対象を捨てるべきなのである。」

「キュビズム、未来主義からシュプレマティズムへ——新しい絵画のリアリズム」(1915年)

見慣れているのに、どんなものとも関連づかない。馴染み深いのに、どんな情景も呼び起こさない。意識の中にある繋がりを断つことによる驚き。

建築は形から脱しなければならぬ。

マレーヴィチがたどり着いた究極の脱色は「白の上の白」だろう。これ以上の抽象を求めても、その先に道はおそらくない。脱色されきった感覚を保ったまま新たな絵画を生み出そうとしたマレーヴィチの姿勢になりたい。

「脱色」をめぐる言葉たち

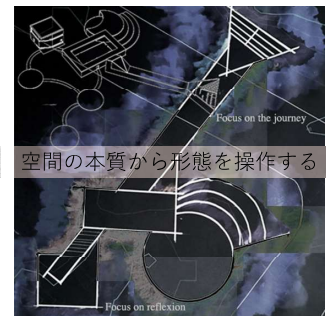
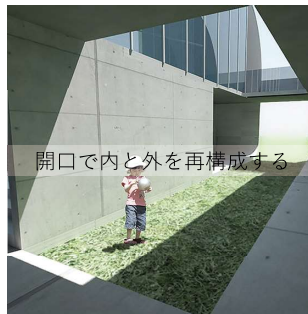
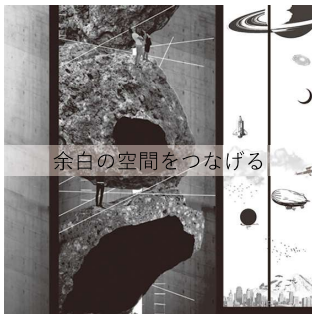
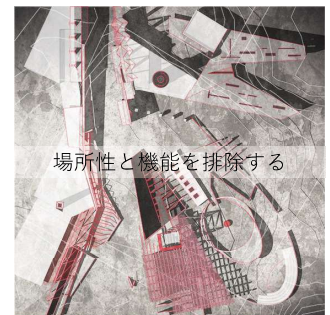
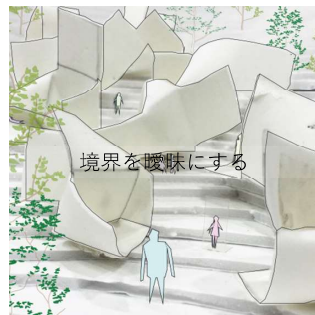
直観の中に新しい理性の輝きがある。

白紙のキャンバスに描く絵画と、既に機能によって着色された敷地に設計する建築の差を考える。

プログラムを排除し建築を解放する。

合理性とは全体が織りなす秩序であり、非合理性とはそのものが持つ欲望である。

それぞれの「脱色する」



01. 三浦 健

「9つのイメージ形態操作による終焉的建築—新しい着色へ—」

“機能”と“敷地との関係”の排除

- “直観的な形態は、無から生ずべきものだ”
- “構成とは……重さと速度と運動の方向をもとに成り立つ”
- “直観的な感情によって、二つの形態の意外の対決から力と緊張をもった不協和のエネルギーがうまれた”
- “事物は多くの時間的契機を含んでいる”

これらは『ロシア・アヴァンギャルド芸術』からの引用です。
シュプレマティズムにおける究極の脱色は方向性や配置にたどり着きます。建築における脱色する空間とは、脱色されたものではな

いのです。徐々に「脱色」し新しい概念としての着色をふるまう空間を目指します。機能の残り香と敷地と関係をもった形態が薄れていく先には、描き手としての私の場に対するイメージ形態が浮かびあがります。いわゆる直観を操作したこの形態は建築というよりもモニュメントの要素が強いのですが、人が訪れることで非場所性の空間体験を促します。これはマレーヴィチに代表されるシュプレマティズム絵画が、見るものに自由な解釈を許すことに繋がります。絶対零度からうまれる空間の魅力は、体験する人それぞれに私の感覚とは違った意味を感じてもらうことではないでしょうか。

Basic Parameters

重力・電力場・磁気・速度・重量・慣性・慣性力・慣性モーメント、速度・重量・慣性モーメント、イメージパラメータを掛け合わせた9つのイメージ形態からなる「基本パラメータ」が、自由に組み合わせる。

	POWER IMAGE	SPEED IMAGE	WEIGHT IMAGE
GRAVITATION FIELD			
MAGNETIC FIELD			
ELECTRIC FIELD			

01 委曲の空間	02 迷走の空間	03 抑圧の空間	04 遠方の空間	05 宵の空間	06 逆乱の空間	07 経過の空間	08 振動の空間	09 昇華の空間

02. 菱田 吾朗

「Escape of space」

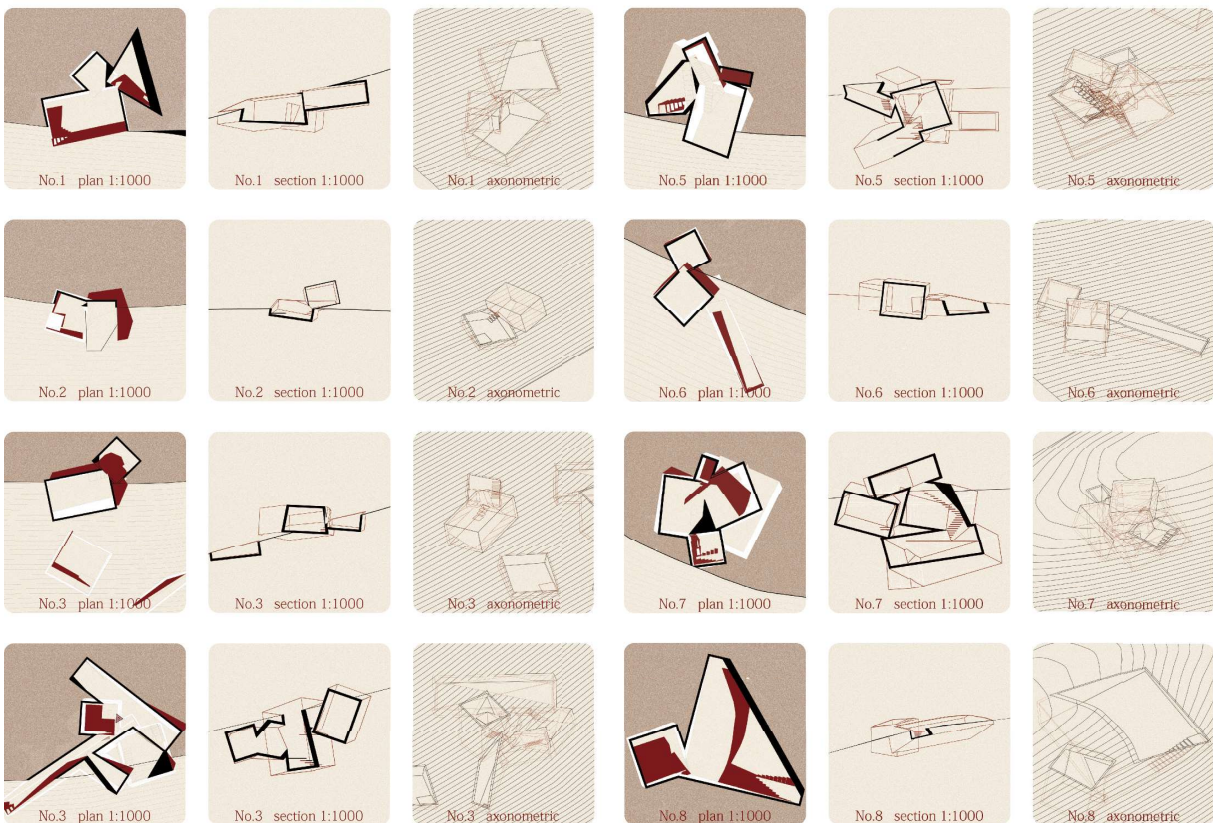
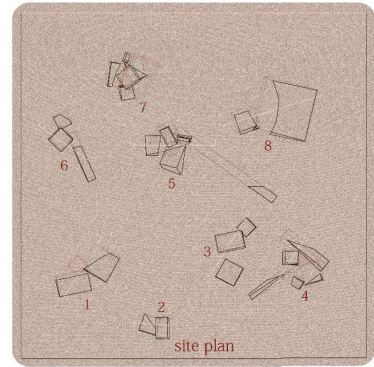
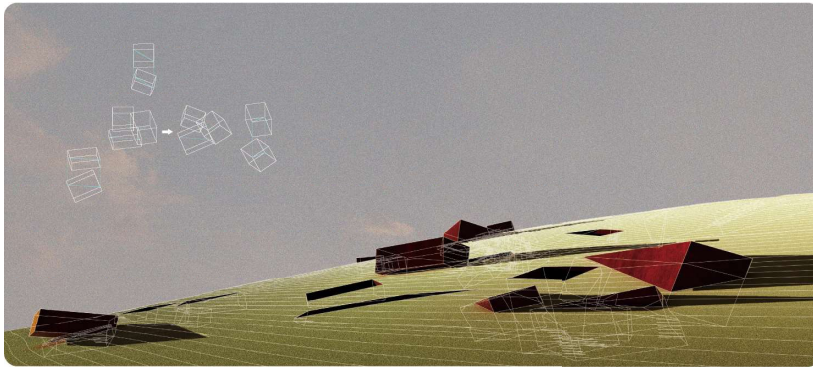
一時の逃避行のように

絵画から主題や事物を切り離し、形態・色彩・構成をそれぞれ分離させたマレーヴィチ。彼は色を現実から切り離し一度脱色することで、現実の色に改めて意味を持たせた。シュプレマティズムの文脈における「脱色する」とは「ある要素を現実の意味から分離し、取り出すことでその要素同士をつないでいた関係性を一旦解き、新たな創造としてつなぎ直すこと」なのではと考えた。そんな考えのもと、この建築は、現実の世界から切り取られた地面

への、夢の中の砂漠への、一時の逃避行である。

常にありふれている空間のスケールを元にしたボリュームを回転させ組み合わせることによって、既定の建築空間の関係性を一旦脱し、新たに作り上げる。地下から湧き上がったボリュームと空から降りてきたヴォイドが地中で出会うそんな連想をさせる8つの空間は新たな脱色の空間となる。そこには人々が寄り添うための水平面だけがささやかに挿入され、脱色へと誘う。

名もない場所で、軽やかに遊び、時には喧嘩をし、空を見上げ、静かに座り込む空間を夢想した。



03. 山口 大樹

「NOWHERE」

記憶の図像化

マレーヴィチは対象を捨て、本質を描こうとしていた。彼に倣って空間の本質を考える。

空間の本質という曖昧を求める中で、視覚情報だけでなく更に体験や感情などが加わってできる「イメージ」がヒントになると考えた。そしてイメージの集積とも言える「記憶」に焦点を当てた。

僕が暮らしていた実家での記憶を元に、それを図像化し、空間を生成する。それぞれの場所での行動、用途、感情、物や家具など、様々

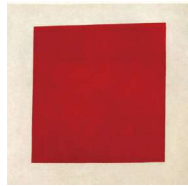
な事象や情念をもとに空間をつくり、それらを利用頻度や意識を元に再配置した。

できあがった空間には、僕の痕跡が多く残っている。痕跡とは僕がどんな風になんをして過ごしていたかを他者に感じさせるものことだ。それらを消す。残った空間には用途や行動は見えないが、感情や心象は宿る。

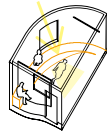
言葉や表現を超え、脳の中に曖昧だが確かに与えられる印象。それこそが空間そのものの価値だと考えた。空間に印象を生み出すために、記憶の図像化は一つの手段となり得るのではないだろうか。



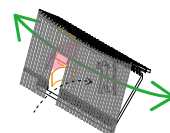
Marevich drew the essence of things



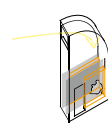
1.Reconstruct spaces from images of memories and feelings.



1. Living room
Floor, Bright, Relax



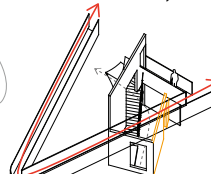
2. Garret(Sister's room)
Wide, Roof, Sky



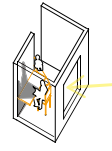
3. Storeroom
Slender light, Width, Read



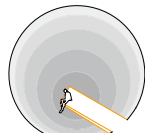
4. Tatami room
Tender, Fragrance, Pray



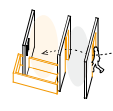
5. Corridor
Distance, Relation, feel



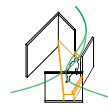
6. My room
Narrow, Setting sun, Sit



7.Grandmother's room
Emptiness, Nobody, Hole

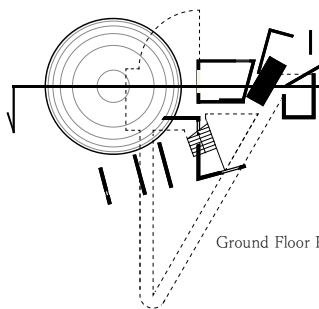


8. Bath room
Gate, Change, Walk

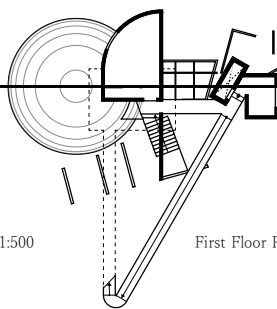


9. Parents bed room
Wind, Through, Sleep

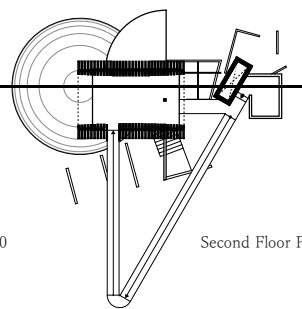
2.Erase my traces from the spaces I made. Pure places remain.



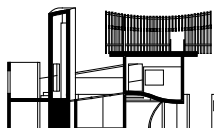
Ground Floor Plan S=1:500



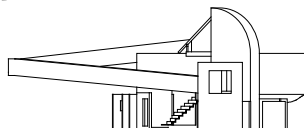
First Floor Plan S=1:500



Second Floor Plan S=1:500



Section S=1:500



West Elevation S=1:500



North Elevation S=1:500

04. 川本 稜

「Harmony」

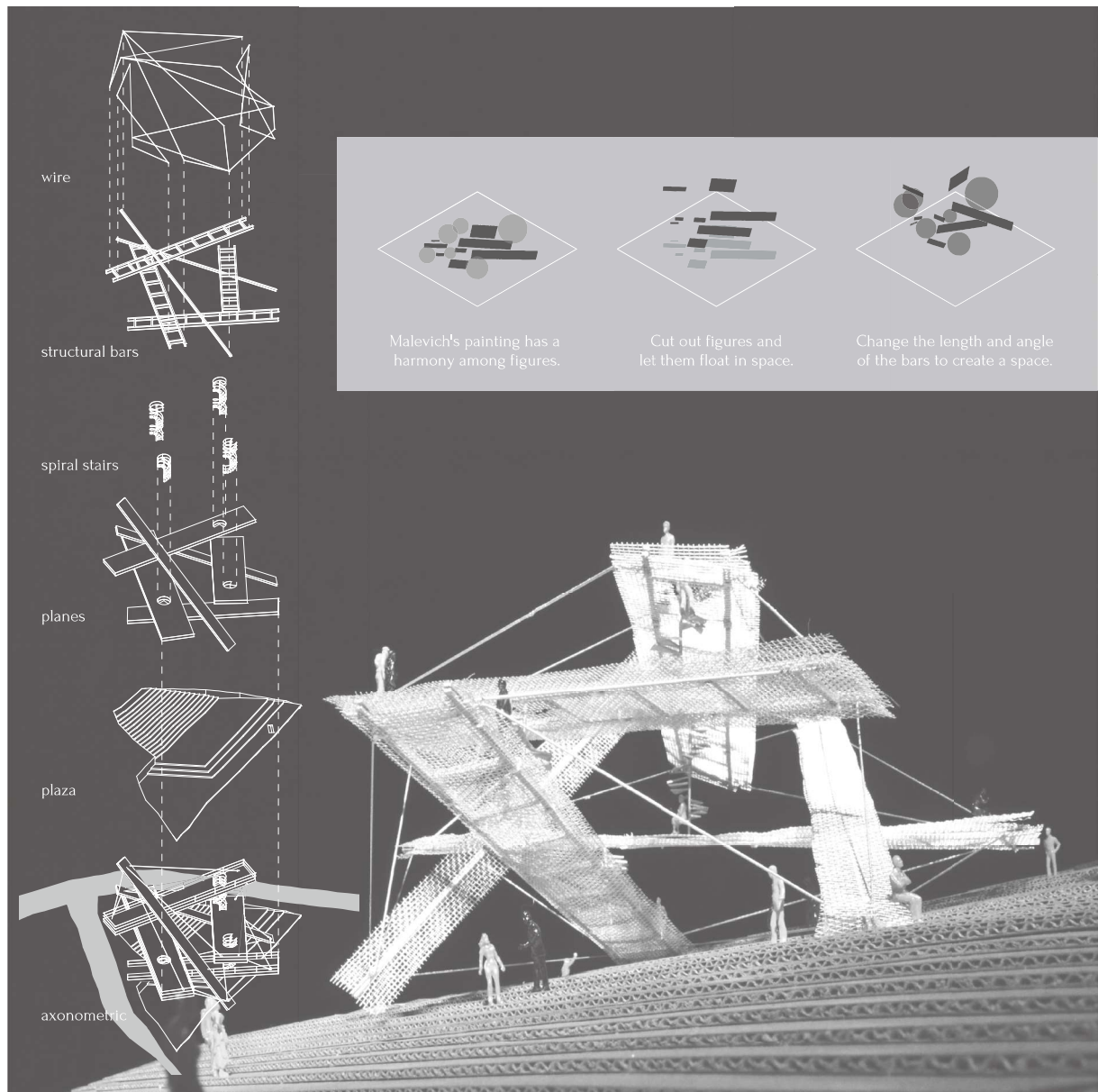
浮遊する面によって地面や既成概念から脱色する

マレーヴィチは絵画において、無対象を描いた。その結果として絵画に表現されたのは、図形と図形間の純粋な<調和>のようなものではないだろうか。<調和>を三次元に置き換えて建築へと昇華させることによって、「脱色する空間」を提案することを試みた。ここでは「脱色」を、地面からの離脱、建築の既成概念からの解放と定義できるだろう。

面を浮遊させる手段として、テンセグリティ構造を利用している。構造内で圧縮を担っている棒材を面材に置き換えることで、面の浮

遊を可能にし、面同士は螺旋階段で接続させて上下の動線を確保している。プロトタイプとして、6本の圧縮材で構成される簡単なテンセグリティ構造を用いた。今日、テンセグリティ構造は主に空間を覆う手法の一つとして用いられているように見受けられ、新しい空間の可能性を切り開いているとは言えない。この建築はそのような現状に一石を投じるものでありたい。

6つの面のうち3つの面は地面に接しており、人々はそのから空間へと導かれるが、やがて進むにつれて<調和>のみによって空間が構成されていることに気づく。建築の様々な柵しがらみから「脱色する空間」が、マレーヴィチの絵画に入り込んだような感覚をもたらす。



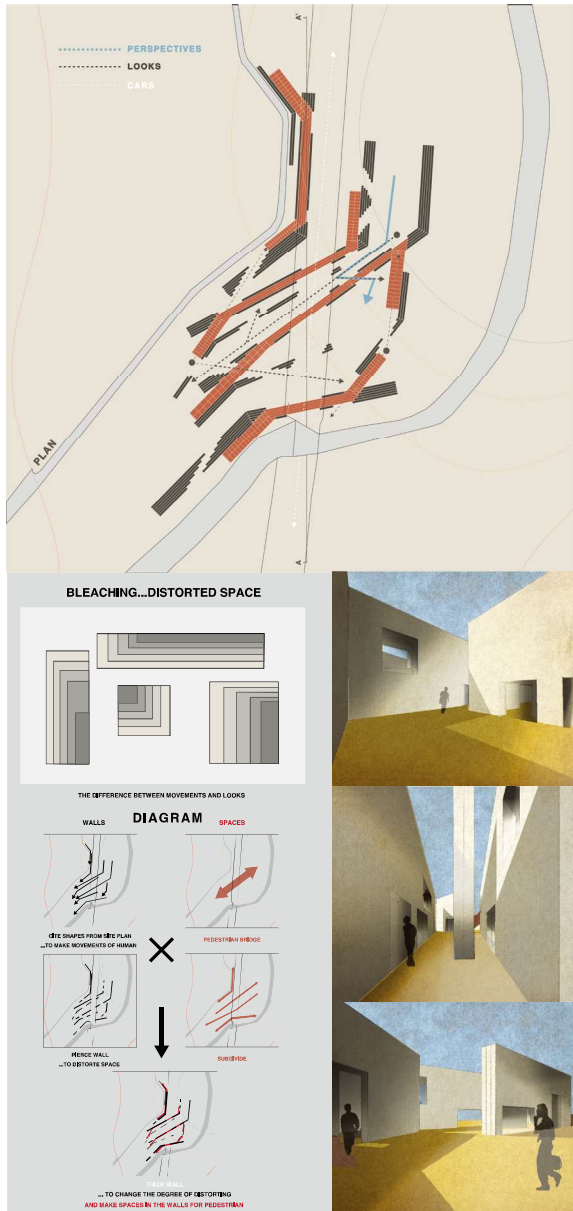
05. 小林 章太

「BITSU」

歪んだ空間

空間とは、関係性である。今回はこの関係性を作る壁に注目し、壁を複数重ね、開口に方向をもたせた。

壁に挟まれた空間を歩いていると、いつのまにか自分の斜め後ろに別の空間が現れている。さらに前方にも全然別の空間が見えていて、くぐり抜けるとつながっていたり、逆に微妙に離れていた。それは、空間が歪んでバラバラになっていくような感覚をもたらすだろう。



06. 王 隼齊

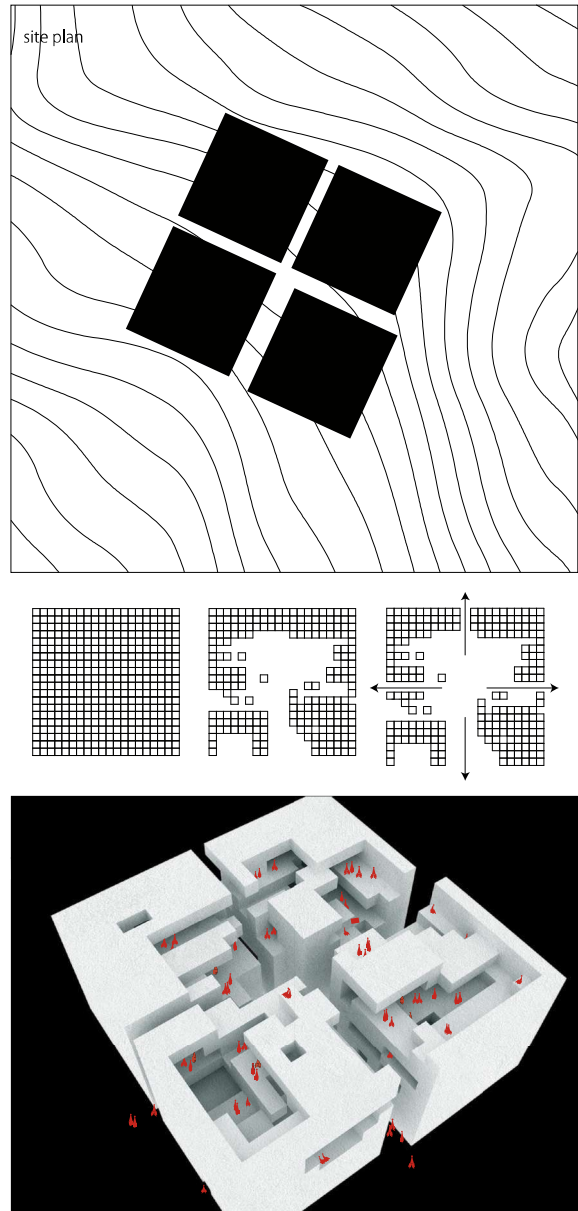
「VOID」

建築の諸要素をなくした後、残ったものは。

脱色する空間について考えるとき、記憶法である「記憶の宮殿」を思い出した。これは、脳内に見慣れた場所をもとに、空間を定義することによって記憶を保存するという方法である。

現存する建築も、建築の基本要素である壁、柱、床、開口部によって決まった機能を定義されていると考えられる。それらの定義によって、建築の色が決められる。

その逆順として、建築空間の脱色はそれらの要素をなくし、空間を再定義可能なものにと考えた。



07. 田中 健一郎

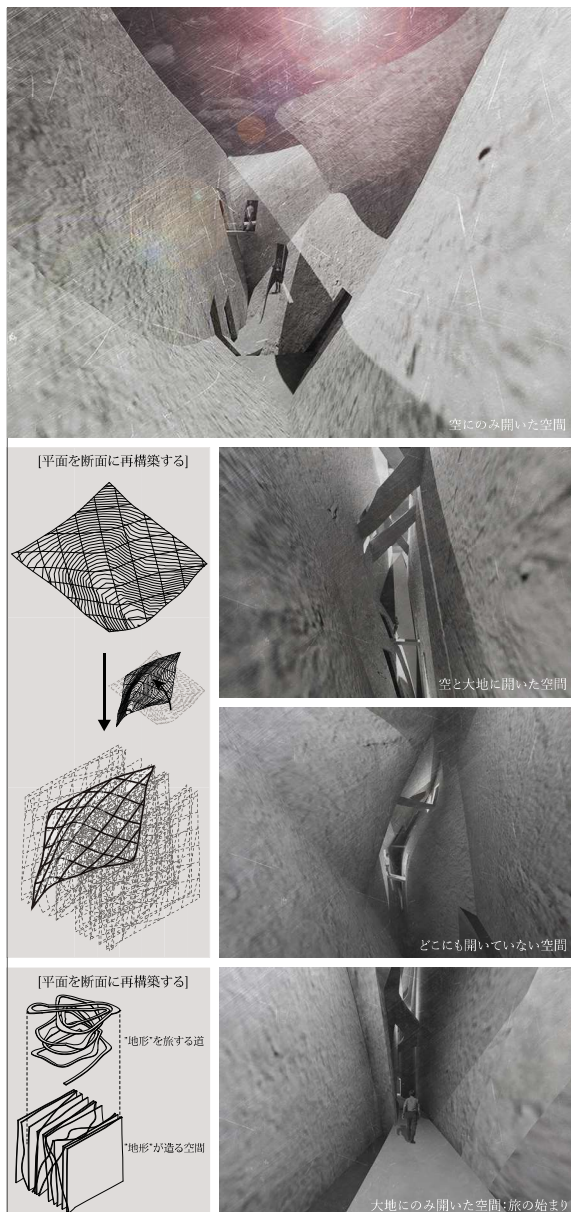
「大地からの解放 -Liberation from the earth-」

関係性の再構築

建築には秩序と方向性がある。

建築における関係性は平面的な秩序によって表現される。ここではそれらを解放し、周辺の秩序から脱却し、方向を失った断片を集積させることで新たな関係を再構築し空間を構成する。

与えられた唯一の関係性“16個の敷地”を90度回転し、集合させることで「空にのみ開いた空間」「完全に抜けた空間」「完全に閉じられた空間」「地面にのみ開いた空間」の4つの新たな空間が出現する。



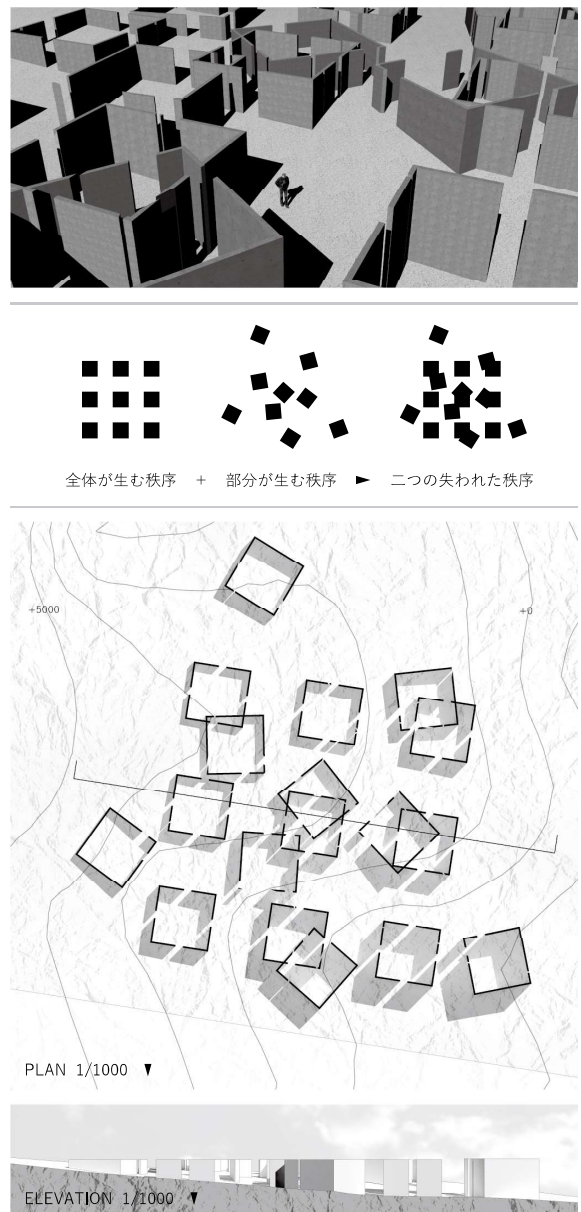
08. 田原迫 はるか

「Square Field Vanishment」

秩序を手放すということ

秩序に従った建築は、心地よく、強く、美しい。建築を設計することは、秩序を生み出すことだとも言えるかもしれない。この課題ではあえてそれを手放すことを「脱色」ととらえ、空間に表した。

ここでは、初めから無秩序な空間を設計するのではなく、2つのベクトルの異なる秩序を重ね合わせた。具体的には、全体から決定される秩序と部分から決定される秩序である。それらが同時に存在することで、互いの秩序は失われる。足を踏み入れれば、日常の所在の感覚から抜け出したような空間が広がるだろう。



脱色する空間

Decolorizing Space

竹山 聖

直観とは意識的に形態を創りだそうとする新しい理性のことである^{註1}。

Intuition is a new reason, consciously creating forms.

さあ発進！ 白い、自由な深みが、永遠が諸君の目の前にある^{註2}。

Sail on! The white, free depth, eternity, is before you.

カジミール・マレーヴィチ

シュプレマティズムとは、現実の対象から離れ、純粋な空間へと向かう運動であった。外に向かつては宇宙に、内に向かつては純粋な感覚に。それまでの芸術がそうであったように、対象を描き出すことによる探求でなく、純粋な芸術的感性の至高性に身を任せつつ芸術を志向する態度である。マレーヴィチは1913年に白の上に黒の正方形を描き、1915年にはマニフェストを公にした。ル・コルビュジエがドミノ構想を提出した時期と重なっている。いわば時代をあげて、芸術や建築がその還元作業に向かっていた、と云っていい。

そしてそれはとりもなおさず、建築があらためてその自律性を問い始めた時代でもあった。すなわち、なにものかに依存して（オーダーであったりスタイルであったり、趣味であったり、もどきであったり）建築の形態が決定されるのではなく、建築には建築の自律的な秩序があるのではないか、という信念に基づく探求作業でもあった。因襲は言うまでもなく他律である。

芸術においても、描き出される対象の有する物語性や象徴性に寄りかかるのではなく、描きだされる対象から離れ、対象を脱して、いわば他律性を排して、純粋な感覚へと向かう還元作業が進められた。

夾雑物きょうざつぶつは取り除かれる。1908年のアドルフ・ロースの言葉、「装飾は罪悪である」に倣うなら「装飾」を、だ。「様式」でなく「装飾」でなく「因襲」でなく「意味」でもない。いらぬものは取り除き、純粋な形式に還元する。これ以上取り除くことのできないほど純粋な状態に、芸術を、建築を、還元する。

このとき、物知り顔の、理屈っぽい、手垢にまみれた論理を弄ぶ理性でなく、直観が手掛かりとなる。それは思いつきの直観でなく、新しい理性ともいうべき、意識、身体からだの底を流れるはずの、新しい秩序の源泉である。これがマレーヴィチの「直観」であった。

歴史を振り返ってみれば、近代建築の課題は、意味（装飾／様式）からの脱却、すなわち形式への還元であった。そして、それは芸術のすべての分野に共通した課題でもあった。デスティル、ロシアコンストラクティヴィズム、キュビズム、シュールレアリズムを通じてこの関心は分け持たれ、音楽では物語豊かな標題音楽から離れて12音階による無調音楽に至る流れを生み、絵画では抽象絵画を生んだ。それは因襲的な価値観からの徹底的な離反であった。意味を消すこと。純粋な感覚の流れを抽出すること。そこに新たな価値を、そして秩序を見出すこと。

マレーヴィチのこうした試みの底を流れる態度、そしてその先に現れる空間を、われわれは「脱色する空間」と名づけた。それは何故か。

註1 J.E. ボウルト編著『ロシア・アヴァンギャルド芸術』川端香男里、望月哲男、西中村浩訳、岩波書店、1988、p.169。Russian Art of the Avant-Garde: Theory and Criticism 1902-1934, Edited and Translated by John E. Bowlit, The Viking Press New York, 1976, p.132.

註2 J.E. ボウルト編著、前掲書、P.182。

マレーヴィチはもとより色を否定しようと考えてはいない。むしろ色を徹底的につきつめようとした。セザンヌが対象を徐々に脱し、解体して、画面を色の饗宴とした功績を、20世紀の画家たちは明晰に感じ取っていた。絵画は物語でなく、画面であり、そこに展開される色面の構成である。色によって奏でられる音楽である。

マレーヴィチはこのように語っている。

「私にとって明らかなことは、色彩の要求にしたがって構築される純粋な色彩絵画の新しい枠組みが作り出される必要があるということであり、また第二に、色彩それ自体も絵画的混沌状態を脱して独立した単位に、すなわち集合的体系（システム）の一部分たり、かつそれ自体独立した部分たる構造（コンストラクション）へと、進化してゆくべきだということである。It became clear to me that new frameworks of pure color painting should be created that would be constructed according to the needs of color; second, that color in its turn should proceed from a painterly confusion into an independent unit — into construction as an individual part of a collective system and as an individual part per se.」^{註3}（傍点は筆者による）つまり、マレーヴィチは決して色を否定しているわけではなく、むしろその関心の中心には「純粋な色彩絵画の新しい枠組み」がある。感性に支えられたシステムが、コンストラクションが、ある。

そして彼はこう続ける。

「空の青はシュプレマティズムのシステムによって征服され、漂白され、本当の永遠の概念を示す超越的な白へと移行してゆき、そうして空色の背景から解放されたのである。The blue of the sky has been conquered by the suprematist system, has been breached, and has passed into the white beyond as the true, real conception of eternity, and has therefore been liberated from the sky's colored background.」^{註4}（傍点は筆者による）

この「漂白され」という言葉のロシア語は定かではないが、英訳では breach であり、bleach（漂白する）ではない。それは囲みを破ることであり、突破することであり、限界を超えることである。つまりここではおそらくちょっとした誤訳が行われているのであるが、それが新しい想像力をかきたてもする、という不思議な効果をもたらしている、とわれわれは読んだ。

それは「漂白」でなく「脱色」と読むべきではないか、と。

漂白と脱色は違う。著しく違う。漂白は白くすることであるが、脱色は色を抜け出ていくことだ。では色とは何か。

われわれは、こうしたマレーヴィチのテキストの読解を通して、20世紀初頭の、すなわちちょうど今から100年ほど前の、清新な精神活動を、その還元作業を、いわば「脱色」という言葉を手掛かりにして辿り直そうとした。

註3 J.E. ボウルト 編著、前掲書、P.181。
John E. Bowl, ibid. , p.144.

註4 J.E. ボウルト 編著、前掲書、p.181。
John E. Bowl, ibid. , p.144.

絵画とは対象をうまく写し出すものではなくて、そこに新たな世界を構成する（自然界の姿を原理的なものにまで還元する、ぎりぎりにまで単純化された、形と色面によって）ものだと語るマレーヴィチ。それが「色」という言葉の持つ意味の幅と不思議に響き合っているからである。

「色」はさまざまな意味を持つ。普通には色彩の意味で了解してまちがいない。ただし、たとえば、色がついている、というときのこの言い方には、「色眼鏡を通して物事を見る」といったような、物事を歪めて見るニュアンスがある。つまり「色」が、固定観念、因襲的な考え方を指すのである。

また、仏教でいう「色即是空、空即是色」のように、「色」が「物質」という意味を持つこともある。ちなみに、マレーヴィチのテキストの言う「シュプレマティズムのシステム」やら「色彩絵画の新しい枠組み」は、この「色」に対する「空」のようなものであるようにも思える。仏教哲学において、「空」とは関係のことだからだ。

もとより「色のある世界」とは、美しさや豊かさに満ちた世界の比喻であり、逆に「色のない世界」は無味乾燥で殺風景な世界である、と一般的には了解されている。こうした色のない世界は、マレーヴィチがまさにそうであると批判を受けた desert の風景であり、実はこれはマレーヴィチが思い入れを持って受け入れた言葉でもある。砂漠 desert には純粋な感覚のみが残されるからだ。感覚の他には何もない。純粋な nonobjectivity の支配する場所。経験的対象を喪失した世界。そもそも「色」は「意味の生成」と密接に結びついており、マレーヴィチが一旦括弧に入れたかったのはそのような意味生成（さまざまな固定観念や因襲に満ちた）であった。彼のおこなったのは、いわば世界の還元作業だ。すなわち脱色作業だ。日本語の「色」という言葉の持つさまざまなニュアンスをも込めて。したがって、マレーヴィチの意図した構想を、あえて「脱色」という言葉に込めてしまっても良いのではないか。

誤訳に触発された面もあるにせよ（誤配の可能性は「郵便的」なものであり、エラーや意味の水平的な移行は、そもそもポエジーの本質であって、それは無意識の層に触れている）、思考の運動、さらには脱線を、ポジティブに捉えて実り豊かなものとするのもできよう。

むしろ「脱色」をこのように解釈してさらに建築的思考を深めていく事はできないか。あるいはこれは、マレーヴィチの精神の本質を、案外穿った言葉なのかもしれない。

このようにわれわれの読みは重ねられていった。

2017年春に出版された村上春樹の小説『騎士団長殺し』は、「免色（めんしき）」という名の特徴的な人物の登場でも暗示されているように、絵を描くこと（主人公と、その仮住まいの持ち主は、ともに画家である）、とは、いわば根源的な還元作業、脱色作業である、という、さながらジャコメッティのような（もちろんマレー

ヴィチとはやや方向性が異なるのだが) 絵画観の提示があって、「脱色」という言葉の射程を確かめたくなるモチベーションの一つを与えてくれた。

註5 竹山聖「形式化の意志と醒めた爽やかな楽観：リチャード・マイヤー論」『現代建築を担う海外の建築家 101 人』鹿島出版会、1985、pp.138-139。

さらにまた遡って、私が初期のリチャード・マイヤーを論じた^{註5}ときに考えていた「形式への還元」、その「意味の消去」を通じた建築の原理的な姿の追求のことも思い出されて、「脱色する空間」という言葉に至った。

2017年7月に日本では公開された「ブランカとギター弾き」は、主人公の少女ブランカが、裏切りと疑心暗鬼の支配する混沌と混乱のスラムのなかで出くわすさまざまな出来事や、盲目のギター弾きとの出会いを通して、その猜疑心や貪欲に色づけられていた心が、信頼と愛情によってあらためて染め上げられてゆく、という感動的な場面に満ちた映画であったが、このブランカは「白」だ。少女の名前は「白」を意味する。まっさらな心の可能性を意味する。人間はまっさらな心に還元される時を持つことができる。そしてそのまっさらな状態は善意に満ちた、愛に満ちた状態への予感である、という人間への信頼をも謳いあげている。

「色」をそのメタフォアをも含めて想像力の射程に収め、これを不在と結び、虚の中に置き、「あらずあらず」の論理にさらし、花も紅葉もなかりけりの心境をトレースし、その真只中において脱してゆく作業。こうした作業が求められ、遂行された。

「脱色」は「色」を脱するのであって、固定観念や因襲からの脱出、通常の意味に満ちた色や形からの脱出、ともすれば建築がまといがちな「社会性」からの脱出、政治や経済やビジネスや投機からの脱出をも含んでいる。プログラムやコンテキストという建築の成立と伴からも一旦距離を取る。建築という精神的秩序を求める行為の根源を見つめ、無意識をくぐり、パルテノンやパンテオンやハギアソフィアといった、意味や社会性を突き抜けた形式の高みをも見据えつつ、空間の始原へと遡る試みでもあった。

「脱色する空間」とは、「脱色された空間」ではない。つまり他動詞の受動型ではないのであって、空間が脱色されるのではなく、自ずと脱色される、自ら脱色されてゆく、そうした自動詞的な、それ自身が主体であるような空間がここでは問われている。二項対立的に脱色する主体があり脱色される客体がある、というような、あるいは布を染めたり漂白したりする、といったような、対象と行為の乖離があるのでない。その場所で脱色が遂行されていく、そのような空間を、建築という行為を通して構想していけぬか。マレーヴィチが砂漠にその空間の雛形を見たように。宇宙に突き抜けて空色を脱し、内に向かって意識を突き抜け無意識へとダイブしたように。

では、建築を原理的に還元し尽くして、しがらみから解放したとき、どのような「形」が可能なのだろうか。そこにどのような「新しい理性=直観」が働きますのだろうか。

建築は、合理性（論理、理性、ロゴス、etc.）と非合理性（情念、欲望、エロス／タナトス、etc.）の重ね合わせとして生み出される。だからこそ理性という言葉にどのような含意を込めるかには、注意を払うべきだ。因襲的な意識に捉えられた順応的理性では、新たな世界の構想の役には立つまい。マレーヴィチは「直観」という言葉を「新しい理性」と結びつけた。この「直観」こそが、合理性と非合理性の間をつなぐのではないか。設計のプロセスで決断がなされるとき、論理と同時に直観が働いている。「直観」は、ともすれば、いい加減な判断、根拠のない判断、として軽蔑、排斥されがちである。しかしそこに新しい理性の輝きが秘められてはいないか。

建築は当為ではない。かといって恣意でもない。つまりこれしかない、というものでなければ、なんだっていい、というものでない。しかも喜びや驚きといった、ただ単なる論理を超えた期待の地平が隠れている。だからこそ、そこには合理の判断を超えたところの、ある非合理といってもいい決断の構造があるのである。

建築という行為を、社会や資本への付度やら、大衆への迎合やら、なにがしかのイメージ操作として遂行するのではなく、発見的で、非合理とすら呼んでもよい決断を促し、遂行してゆくには、どのような新しい理性のあり方が求められるのであろうか。問いかけは問いかけを呼ぶばかり。しかしこうした原理的な問いかけの向こうにしか、新たな建築は姿を現わすまい。未来の建築のありようを構想すること、このことを措いて建築論の課題はない。

100年の時を経て、20世紀初頭の清新な精神に触れる。われわれは創造的に過去を振り返らねばならない。瑞々しい感性を持って、歴史を辿り直さねばならない。

20世紀初頭から今日に至る、その壮大な実験の成果を、結果を、われわれはすでになにほどか手にしている。モダニズムもポストモダニズムもコンセプチュアリズムもコンテクスチュアリズムもコンピュータ・エイティド・バロックも。いまあらためてその時の流れに思いを馳せつつ、20世紀初頭の精神に再度立ち戻り、触れることが、おそらくはわれわれの思考に、善き、人間精神への信頼に満ちた、刺激を与えてくれる。

「脱色」は、思考と感覚の大掃除であり、リセットでもある。